

オンライン授業における対話と文学読解

The Things They Carried を Certeau の言葉とともに読む

藤野 功一

はじめに

英語文学の内容について小グループに分かれて対話を行う場合、学生が自己の持つ語彙と発想の限界を乗り越えることができず、自己と異なる視点を意識した上での討議を十分に行えない場合が多い。本論考では、文学を用いて批判的思考と対話の力を育成する英語教育の一例として、Tim O'Brien の *The Things They Carried* (1990) を、ヴェトナム戦争を視野に入れつつ暴力を論じた Michel de Certeau の *Culture in the Plural* (1974) から引用した言葉とともに読む授業において、学生の思考と対話の質的深化を促した授業の実践報告を行う。授業は主に Zoom と Google Classroom の組み合わせにより行われたが、オンライン授業で批判的思考と対話能力を発展させることが可能であることも述べる。

研究発表のカテゴリー、内容、背景にある課題

この研究発表のカテゴリーは、具体的な教育実践例に基づいた「エピソード記述による英語授業の質的研究」であり、内容は、「複数の英語テキストを読むことにより批判的思考と対話の力を育成する英語教育実践の報告」である。今回の発表の背景として、まず、テキストの内容について小グループに分かれて対話を行い、その対話をもとに短い課題を提出する場合、自分のアイデアを単純に繰り返すだけに終わることが多いという問題がある。バフチンも言うように「言語は常に他者と共有されている」(Bakhtin 293) はずだが、それにもかかわらず、英語教育の現場においては、学生が異なる複数のテキストの言葉を組み合わせたり、あるいは、他の学生と対話した後、その共有した言葉を利用しながら、思考を発展させ、その内容を英語の文章で表現するようになるまでの指導法はあまり確立されていない。本来、学生であれ誰であれ、自分が話したり、書いたりする言葉の独自性を作り上げる過程においては、他者の言葉を自分のものにし、複数の異質なテキストから利用できる言葉を引き継ぎ、自分の思考を進めるという経験を経る。そうしなければ、自分の思いもよらなかったところまで思考を進めることはできないが、しかし、これまでの大学の英語教育では、自分の中に他者の言語をそのまま取り込む段階から、取り入れた言語を自分なりに使いこなすことができるようになるまでの適切な指導法が確立されてこなかった。今回はこのような背景を踏まえて、文学を使った英語教育において学生が他者と対話し、言葉を共有し、思考を発展するように促すためにはどうすれば良いかを考えていきたい。

リサーチ・クエスチョン

学生が他者の言葉を自分の言葉として引き継ぎ、その上で、複数の視点を持ち、思考を発展させることで、課題文の質的向上を目指す授業をすることは可能かを検証する。その上で、そのような授業ができた場合、成績評価の基準として「他者と共有した言葉を自分の言葉として使い、複数の視点を持って対象を語り、記述できるようになることを、学生の英語能力の質的向上の指標とする」ことが有効かどうかを確認する。これが今回の研究のリサーチ・クエスチョンである。

使用テキスト

使用した複数の英語テキストの内訳は、ティム・オブライエン『本当の戦争の話をしよう』と、ミシェル・ド・セルトーの『文化の政治学』の英訳の第三章である。ティム・オブライエンの『本当の戦争の話をしよう』は、ヴェトナム戦争を主題にしたアメリカ文学の代表作。英語は読みやすく、短編の連作形式をとりながらも、戦争という暴力を前にした言葉あるいは物語の状況について一貫した考察がなされており、大学生を対象としたアメリカ文学テキストとして好適である。それとともに読むテキストは、独創的なフランスの歴史学者ミシェル・ド・セルトーのテキスト。セルトーは同時代人のフーコーやブルデューと同じく、権力が知の生成の条件であることを明らかにしつつ、彼独自の研究として、ごく一般的な人々の日常生活の中にある知恵の可能性を追求しようとした歴史学者である。彼の『文化の政治学』の第三章「暴力の言語」は、同時代のヴェトナム戦争等を念頭に書かれた章であり、「米軍の爆撃機 B-52 が北ベトナムを破壊しているとき... 暴力について語ることは馬鹿げたことになってしまう」との言葉で始まり、言葉と権力の問題が、戦争という具体的で想像しやすい事例とともに語られている。セルトーの第三章は、『本当の戦争の話をしよう』と共通する主題を考

察しているの、オブライエンの短編を読む際に、セルトーの著作から短い引用を行い、それを考えるヒントとして学生に与えた。授業中でのテキストの扱いは、「英文テキストの理解にあたっては日本語の訳本の使用を許可する。テキストを読んだ後にこちらの問いに答えるかたちで、短い討議をさせる」として「短い課題を提出するよう課すが、前半の課題は日本語で提出させ、授業のコース後半には主に英語により課題を提出させ、英語による発信能力の向上を目指す」とした。この授業は、英語のテキストを自力で訳読することによって読解能力を向上させる授業ではなく、テキストを読んだ後に、こちらからの問いに答えさせる課題を提出させることで、学生の思考の質の向上と、英作文の質の向上を図る授業である。

授業手順

次のような手順で授業を行なった。(1)授業全体を導く問いの設定。(2)異質な2つのテキストを用いた毎回の問いと課題の設定。(3)Google Classroomによる事前課題の提出。前半は主に日本語、後半は主に英語による事前課題提出。(4)英語課題による英文の質的向上: 授業中は、事前課題を題材にして、ブレイクアウト・ルームを用いた小グループで対話を行う。その後、提出された課題の中からいくつかを無記名で抜粋した文をオンラインで共有し、その場で教師がコメントや添削を行い、それを教員側からのフィードバックとする。授業終了後に再度短い課題で感想を提出させるが、感想を書くときはなるべく他の学生の意見を自分の言葉の中に取り入れるよう指導する。(5)成績評価: 他者の言葉の導入、複数の視点の導入を英語能力の質的向上の指標として成績評価する。

エピソード記述による授業の質的研究

本論考では1人の学生の提出した課題における英文の質的向上を時系列に沿って示した。学生の提出した英語課題文の質的向上により、異なる2つのテキストの導入、それらに関連した学生同士の対話が、学生に複数の視点を内面化させ、それまでの自分の考えの枠組みを超えた思考を促すことを可能にすることが推察できた。

指導上のエピソードとして、授業の中盤で、学生全体に対し、言葉の伝え方について二つ教示したことを紹介した。一つは、まず、言語能力というのは、相手にわかる言葉で喋る能力であるということ。日本語であれ、英語であれ、相手にわかる言葉を喋った時に初めて、自分の使う日本語や英語の力が向上すると指導した。また、相手に自分の言葉をわかりやすく伝えようとするときは、たとえ短い時間であっても、同じ立場に立って伝えようとしているだけで、良い効果があるということを示した。これらの教示により、授業内での学生同士の対話が活発化し、英語での対話にも自発的に取り組む学生が増えた。

成績評価とまとめ

成績評価のために、Google Classroomで毎回の出席点を1点、毎回の課題を3点満点で評価していき、人数も多いため大雑把に文章があまりに短かったら1点、単調であったり他の学生の言葉やセルトーの言葉を引用していても的外れであったり言葉が十分に表現しきれていないようであれば2点、他者の視点が導入され、自分の言葉で表現できていれば3点として評価し、30回の授業ではほぼ毎回短い課題を提出させ、中間と期末に特定の短編についてのレポートを課してそれぞれを30点で評価したところ、平均点73.86点となった。かなり大雑把な評価の仕方であるが、累積していくと教員から見ても妥当な評価に収まった。この基準は学生の英文の質的向上の評価指標として有効であり、成績評価において学生からの不満は聞かれなかった。対面でも、オンライン上でも、相手に理解される言葉を喋り、書くことができる能力が語学能力であると指導し、学生同士が言葉を共有する場を提供することにより、学生の対話と思考の質的向上を促すことが可能であろう。

参考文献

- Bakhtin, Mikhail M. "Discourse in the Novel." 1975. In *The Dialogic Imagination*, translated by Caryl Emerson and Michael Holquist, 259-422. U of Texas P, 2011.
- De Certeau, Michel. *Culture in the Plural*. Trans. Tom Conley. 1974. U of Minnesota P, 1997.
- Fujino, Koichi. *Studying and Teaching W.C. Faulkner; William Faulkner; and Digital Literacy: Personal Democracy in Social Combination*. Lexington Books, 2018.
- O'Brien, Tim. *The Things They Carried*. 1990. Mariner Books, 2009.
- 柳瀬 陽介「英語教育実践支援のためのエビデンスとナラティブ: EBM と NBM からの考察」『中国地区英語教育学会研究紀要』40, 11-20, 2010.